梅若伝説は墨田区だけではなかった

（令和 5 年秋の見学会　令和 5 年年 11 月 28 日実施）

墨田区北部に木母寺があります。山号を梅柳山といい、木と母を組み合わせれば「梅」という漢字になりますなどと寺名の由来にも言われていたりもします。この地を舞台に室町時代に能作者観世元雅が「隅田川」を著し、そこから梅若伝説が生まれて、発祥の地として知られています。

墨田区民には馴染みの深い梅若伝説ですが、埼玉県春日部市にも梅若伝説・三囲神社・業平橋などがあり、区内で活動をしている私達ボランティアの会としては、現地を訪れてみたいとのことで見学会の訪問先となりました。

見学会開催日　令和 5 年 11 月 28 日（火）

見学コース　春日部駅集合→春日部市立郷土資料館→旧粕壁宿周辺見学と昼食
→三圍稲荷社→春日部八幡神社（都鳥の碑）→満蔵寺（梅若塚）
→古隅田公園（古隅田川の土手）→業平橋→豊春駅解散

見学会を終えて

春日部市は、江戸時代には日光街道の粕壁宿として栄えていたこと、石器時代の人々の暮らしの痕跡、古墳などの発掘調査、古隅田川が作り上げた砂丘地形などについて春日部市立郷土資料館の方に詳しく解説をしていただきました。

さて、梅若伝説など市内に残る伝説を紹介したパンフレットを手に資料館を出発です。

始めは江戸時代に粕壁の中心となっていた大落古利根川（おおおとしふるとねがわ）周辺の遊歩道や街道沿いに残る宿の面影の見学です。昼食は春日部のご当地グルメ「春日部やきそば」をチョイスし午後からの歩きに備えました。

宿場の外れに位置する最勝院（明治 26 年から 30 年にかけて東京の千住と結ぶ千住馬車鉄道の終点となっていた）→三圍稲荷社（墨田にも同名で、同じように狐と老夫婦に関する云われの神社あり）→春日部八幡神社（郷土資料館で説明を受けた砂丘に関しての解説板がありました。またこの神社の銀杏は鎌倉鶴岡八幡宮より飛んできて一夜にして大木となったと伝えられ黄葉が見事でした。さらに在原業平の詠んだ都鳥の歌に関する石碑あり）。ここまでは住宅街を歩きまし

たが、この先は畑の中の道路端を歩くことになりますのでタクシー移動でした。→満蔵寺（梅若塚、梅若伝説の碑、お葉付イチョウ）。満蔵寺をあとにし、近くのコミュニテイバス乗り場で仮解散です（訪れた当時は、火曜・木曜・土曜と週3日運行されていましたが、令和5年12月末で路線廃止となっています）。次に向かうのは、業平橋です。以前は古隅田川の土手となっていた古隅田公園内の遊歩道を晩秋の風に追われながら市街地を目指します。遊歩道の左右は、すでに開発され住宅地となり昔の河床の痕跡も伺えませんでした。公園を抜けると小さな川が見えてきました。古隅田川です。古代には、この川による砂丘の形成、在原業平が都鳥の歌を詠んだとのことですが、現在の姿からは想像も難しい状態でした。この川に長さ10メートルに満たない橋が架かっています。銘板は「業平橋」、最後の見学地です。

　見学会では梅若伝説の墨田との共通点があるのではとの思いもあり1日歩き回りましたが、中世頃の古隅田川を中心とした街道筋の様子と現在とのかけ離れが大きすぎて想像もできませんでした。ただ、墨田でも梅若丸は能や謡曲の主人公として作り上げられた想像上の物語であり、中世頃に多かった「人買い」の実話から発展していった要素が各所に伝わって地名などにも残されていったのではと考えることができました。〈久保田 記〉

春日部八幡神社にて